「問いと対話」講演会レポート

5月1日、1学年向けの地域科学探究の一環として、早稲田大学大隈塾を担当されていた村田信之さんをお招きし、「問いと対話」をテーマに講演をいただきました。

今回は、生徒一人ひとりが「問い」を立て、仲間と「対話」する中で、考えを深めていく過程を体験しました。講演を通して伝えられたのは、「問い」が持つ力、そして「対話」が生む新しい価値についてでした。

講演いただいた、村田信之様
（一般社団法人ストーンスープ代表理事）

アイスブレイクで“問い”の第一歩を体感

はじめに行われたのは、アイスブレイクとしての対話ワーク。「4つのテーマ」について1分ずつ話したあと、お互いに「なぜそう思ったの？」と質問を重ねていきました。

このやり取りを通して、「問いを立てる」ことが対話の出発点になると気づかされます。自分の考えを深めるために、相手の考えを聞き、質問することも重要です。

「問い」は、関係と認識を編み直すきっかけ

村田さんは「問いとは、対話を通じて認識と関係性を編み直すための媒体」だと話しました。

前回までの地域科学探究の時間では「自分で問いを立てる」ことに取り組んできましたが、今回は「みんなで問いを立てる」方法、つまり“対話”による問いの深まりがテーマでした。

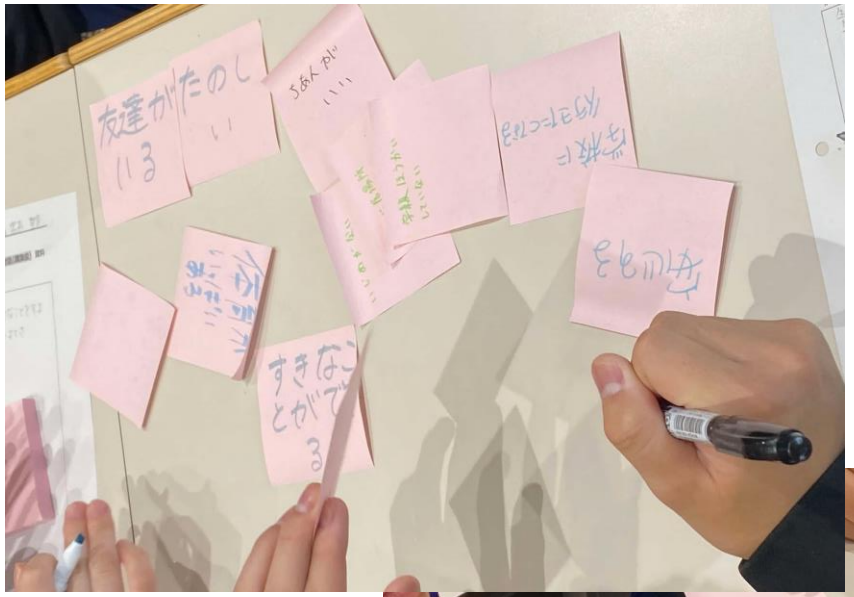
「問い」とはなにか【レクチャー】【5分】

「問い」の定義

人々が創造的**対話**を通して**認識**と**関係性**を編み直すための**媒体**

『問いのデザイン』安藤勇樹・塩瀬隆之　学芸出版社　2020年

「居心地の良い学校」って？　みんなで考えた理想のかたち



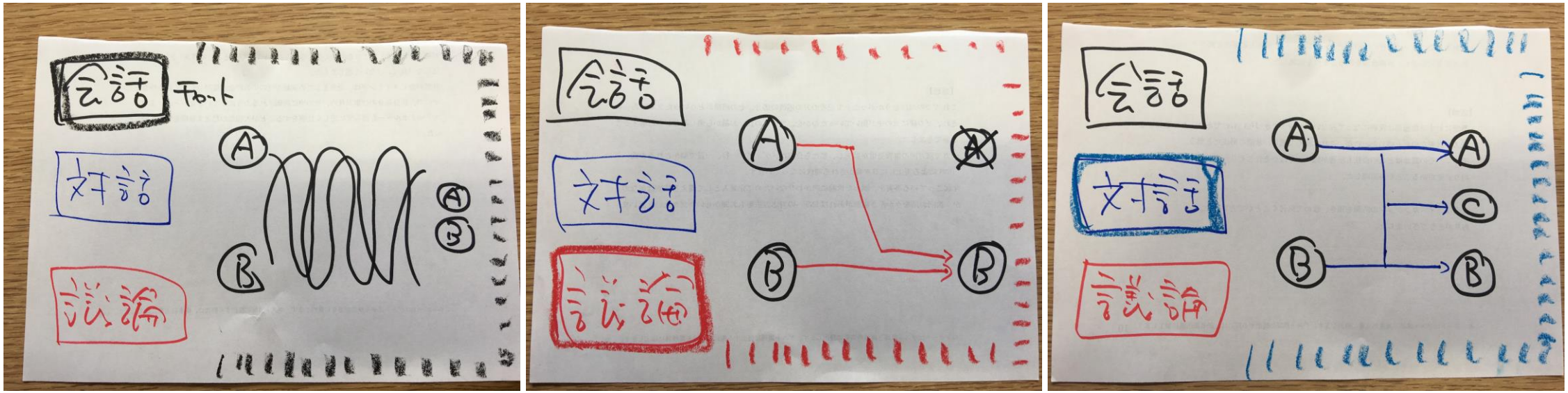
グループワークでは、「居心地の良い学校って？」をテーマにブレーンストーミングを行いました。

まず「居心地がいいってどういうこと？」から話し合い、それぞれが感じる“心地よさ”を言葉にしていきます。

その後、出てきたアイデアをもとに、「どうすれば実現できる？」「実現していないのはなぜ？」と問いを深め、活発な意見交換が行われました。

対話とは？ 新しい価値を生む話し合い

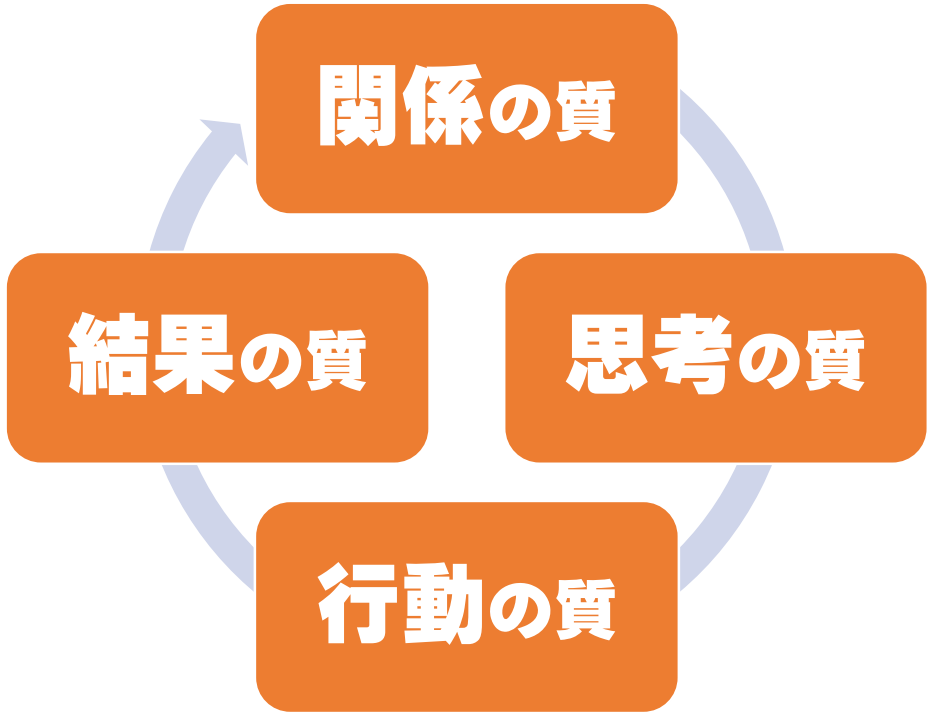
村田さんは「会話」「議論」「対話」の違いについてもわかりやすく説明してくださいました。



対話とは、否定せず、お互いを尊重しながら新たな視点を生むもの。

これを支えるのが「心理的安全性」――安心して話せる雰囲気のことです。

成功循環モデルと「問い」の力



村田さんが紹介してくださった「成功循環モデル」では、良い結果は「関係の質」から生まれるといいます。

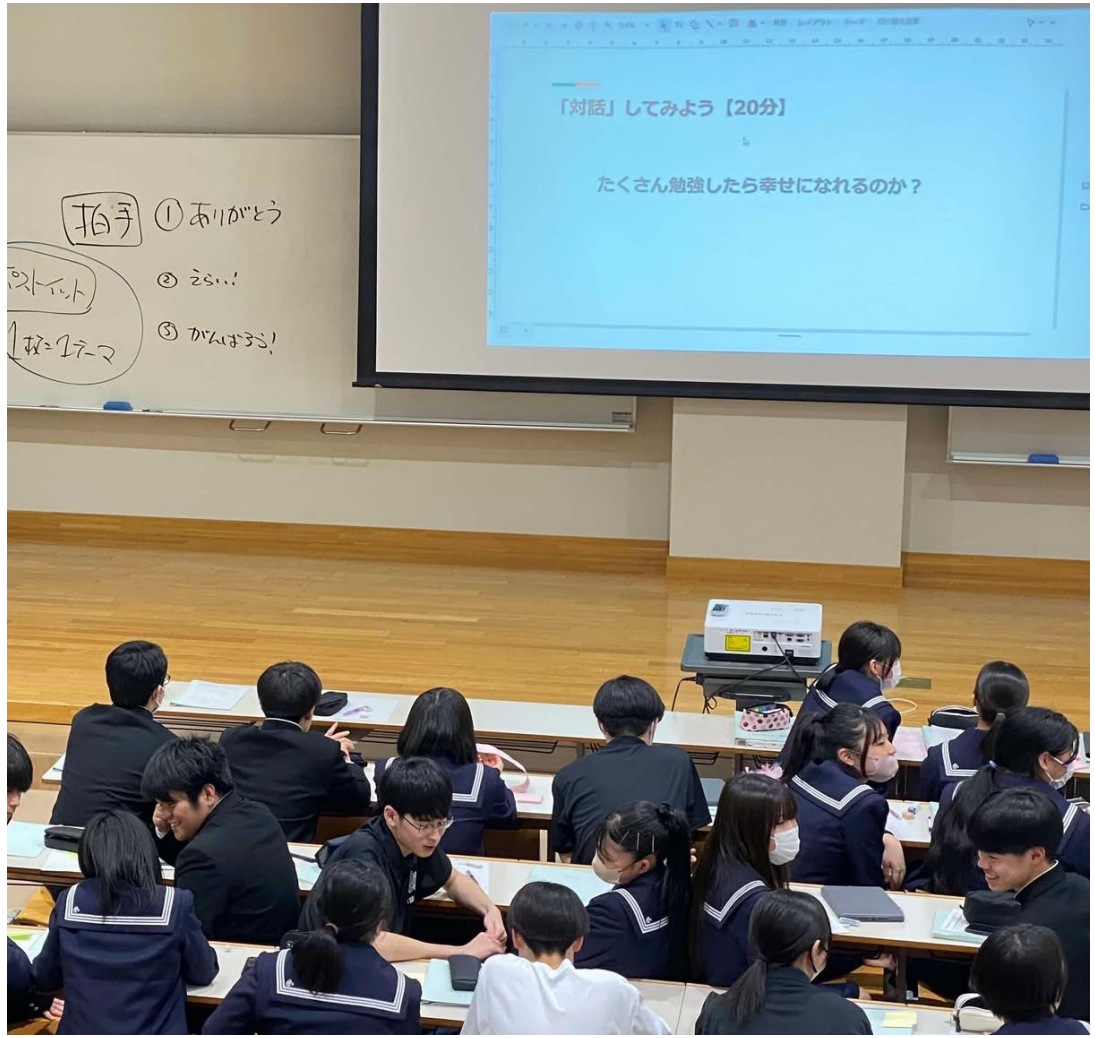
関係性が良くなると、考えが深まり、行動が変わり、最終的に成果へとつながるのです。

「たくさん勉強したら幸せになるのか？」から始まる対話

ワークの最後には、「たくさん勉強したら幸せになれるのか？」という問いをテーマに対話を行いました。

「幸せって何？」「たくさん勉強って何を指すの？」――グループ内でそれぞれの捉え方をすり合わせるところからスタート。

近年は、「Happy（うれしい）」より「Well-being（心身ともに良い状態）」を大切にする考えが広がってきています。問いに答えを出すこと以上に、問いを立てて考え続ける姿勢こそ、これからの時代に求められる力なのです。



「わからないことに耐える力」を育てて

ネガティブ・ケイパビリティ（Negative Capability）

「今は答えが出せない」
「でも、わからないままでも大丈夫」
「この不確かさと共に居続ける」力

最後に紹介されたのは「ネガティブ・ケイパビリティ（Negative Capability）」という言葉。

これは「わからないことに耐える力」を意味します。

探究活動もまさに同じ。今すぐには答えが出ないことにも向き合い、考え続ける力を、生徒たちには大切にしてほしい――

そんな願いが込められていました。

おわりに

問いを立て、対話を重ね、仲間とともに考える時間は、生徒たちにとってかけがえのない経験になりました。

村田信之さん、貴重なお話をありがとうございました。

今回得た学びを、これからの学校生活や探究活動に活かして欲しいものです。

今後も、「問い」と「対話」を通して、自分の考えを深め、仲間とつながりながら成長していく生徒たちの姿に期待しています。